第六回文化講演会

上越市文化財調査審議会委員長
元 新潟県文化財保護指導委員
植木 宏

上杉謙信公
～その人物と信条から学ぶ～

群雄が蜂起し、打算と功利の激しい戦国の世に、都から遠く離れた越後に在って精一杯生き抜き、敵将からも称賛された。純粋なものの考え方をし、慕道心を抱き、義侠心富む英雄だった。当時、越後に上杉謙信あり」と全国から注目され、その名を馳せるに至ったいきさつは、人間としての信念と、勇気と、豊かな人間性の中から生まれたものと思われる。

越後の聖将上杉謙信、その生いたちと修養、そして心に響いた人生訓(家訓や、臨戦信条などを追ってみよう。

謙信の生いたちと修養

謙信は享禄三年（一五三〇）一月二十一日、戦国時代後半期の乱世を背負わされて、春日山城の御屋敷で呱々の声をあげた。父は越後守護代長尾信濃守為景、母は同族の栖吉城主（長岡市）…長尾氏の娘といわれる。幼名を虎千代といった。

戦乱の世に生を受けた謙信は、慈悲救世を本願とする観音菩薩に帰依する母の感化と、十六才で初陣してから戦場にまみえること一〇〇余回という父の影響を受けながら成長した。特に自らは一間四方もある城郭模型で人形を操りながらの城攻めや、野戦の遊びに興じ、近所の餓鬼大将だった。

天文五年、七才のときに城下の曹洞宗林泉寺へ修行に入れられた。林泉寺は、謙信の祖父能景が自分の亡父重景の供養のために建立した寺である。十四才まで名僧天室光育のもとで厳しい禅の修行と文武の薫陶を受けた。名将謙信の人間的基礎は、このころ培われたものであろう。

謙信が林泉寺に入山した年の暮れに、父為景は病死したが、喪に乗じて逆徒が迫り、謙信は身に甲冑をつけて悲痛な葬送に参列した程だったという。この現実が修行中の謙信には終世の多大な刺激になり、菩提心をおこさせ、求道の志を心に植えつけたようである。

戦乱に明け暮れた謙信が、天下取りを望まず、完全な戦国時代的武将になりきれなかった所以は、このような生いたちにあるような気がしてならない。

十四才で元服し長尾景虎といい、二十四才のとき、京都大徳寺の撤岫（てっしゅう）宗九禅師から法号を授けられ、宗心と称し有髪の僧となる。三十二才のとき、関東管領上杉憲政から家督を継いだのを機に政虎と改名し、以後は上杉姓を名のった。さらに同年暮れに、室町幕府十三代将軍足利義輝から菊桐紋章の使用を許され、輝虎と改名した。四十二才の暮れに、林泉寺七世宗謙のとき、法号を改め謙信と称した。

謙信と文芸

謙信は学問と文芸を好んだ。常に儒学者を左右に待して四書・五経（中国の儒学者）の講義を受け、ときに老荘諸子（中国の哲学者）の学説も学んだ。また戦陣においても随行の僧・連歌に孟子（四書の一つ）を書き写させたという。連歌は書道の大家で府中（直江津）にあった安国寺の名僧だった。さらに文芸では、和歌をたしなみ、書道にも堪能だった。林泉寺の「第一義」。「春日山」の額を見ても、その麗筆に感嘆する。また茶湯や能、笛などにも趣味をもっていた。茶道は武野招鴎（しょうおう）と千利休を師として学んだという。陣中にあっても一節笛（ひとよぎりのふえ）を吹き、能を舞い、強敵を前にして悠々と歓を尽くしたほどである。

謙信の家訓と臨戦信条

戦国大名は、支配する領国を統治するために、制定した施政方針や法令を「分国法」と呼んだ。謙信公には分国法と銘うったものは見あたらないが、「謙信の家法」として伝えられている次の条文があ

る。

①心に物なきときは心広く体素かなり
②心に我慢なきときは愛敬失わず
③心に欲なきときは義理を行う
④心に私なきとき　は疑うことなし
⑤心に驕なきときは人を教う（すくう）
⑥心に誤りなきときは人に畏れず
⑦心に邪見なきときは人を育つ
⑧心に貪（とん）なきときは人に諂う（へつらう）ことなし
⑨心に怒なきときは言葉和かなり
⑩心に堪忍あるときは事を調う（ととのう）
⑪心に曇なきときは心静かなり
⑫心に勇あるときは悔むことなし
⑬心に慎しからざるときは願い好まず
⑭心に孝行あるときは忠節厚し
⑮心に自慢なきときは人の善を知る
⑯心に迷なきときは人を咎めず

この家訓を少し解説すると、①は自分の心に下心（野心）のない時は、心がおおらかでゆったりしている。③は自分の心に変な欲望のない時は、正しい筋道で行動できる。⑥は自分の心に間違いがなければ、他人におびえることはない。⑩は他人を許す心、我慢する心があれば、全体のバランスをとることができる。⑬は自分の心にあさましさがなければ、変な望み事はしない。⑮は自分の心におれが、おれがという気持ちがないときは、他人の良さを知る。など。

これらの家訓を見ると、今の社会にこそ必要な、人生訓の極致を説いている。謙信は勇将であるのみならず、人間の師として堂々たる学者でもあった。

永禄九年。謙信三十七才のとき、春日山城内に壁書したと伝える、臨戦信条ともいえる言葉がある。

「運は天にあり。鎧は胸にあり。手がらは足にあり。いつも敵を掌に入れて合戦すべし、疵付く（きずつく）ことなし。死なんと戦えば生き、生きんと戦えば必ず死するものなり。家を出づるより、帰らじとおもえば又帰る。帰ると思えば是亦帰らぬものなり。武士たる道は不定と思うべからず、一定と思うべし。」と記した。この言葉には宗教的な意味が含んでいるが、戦場に臨んでは、「死の中に生あり、生の中に生無し」として、一切の心のこだわりを断ち切り、無我の境地を逍遥する禅機を説いたものである。

また、常日頃の言に「我は少しも天下に望みなし、ただ軍陣に臨み、機を見て敵を破る。これ我が本分なり……」。陣頭常に必勝を期し、功名利達のごときは、あえて念頭に置かなかったのである。

春日山城内の本丸近くに、諏訪社や毘沙門堂を建て、また不識庵を設けて、一心に修養祈願していた。生涯妻妾をもつことなく、みずから毘沙門天王の化身と信じて、不正悪魔を降すべく戦場にのぞんだ聖将のおもかげを偲ぶ言葉である。

謙信は、身は俗界にあって、心は仏界にいる心境だったのであろうか。

おわりに

上杉謙信公。その人物と信条の一端を紹介した。思えば、十四才で元服し、兄晴景の命で初陣。栃尾城にあって下越後方面を平定し、十九才で春日山城主となった。以降四十九才で生涯を閉じるまで三十五年間、南征北伐、関東への出陣十回以上を数え、身の休まる日がなかったにもかかわらず、心を学問に潜め、文芸の趣味に深かったことは、人格の崇高なるを想望させる。

天正六年（一五七八）、謙信は関東の平定を決意し、一月十九日領内の将士に出兵の指令を出した。出陣の日を三月十五日と定めて準備をしている矢先、三月九日突然春日山城内で病に倒れ、同十三日帰らぬ人となった。死因は脳溢血といわれている。

死の一ヶ月前の二月に、京都より画工をまねき、寿像を描かせ、その題詞として次の一首を賦した。

辞世になった名詩である。

四十九年一睡夢　一期栄華一盃酒
生不知死亦不知　歳月唯是如夢中

私達も謙信公の生き方に学び、日常生活を堂々と闊歩できる人間でありたいと願う。

謙信公座像

新潟県出身の彫刻家、千野茂さんの作。氏は製作にあたって「勇猛と仁愛の際立った二面性のあったと思われる謙信公の後者を表現すべく意図した」とのべておられる。

中世の山城は今

上越地方の山城とその特色

【中世の山城とは】

毎日何気なく歩き、登り、耕している身近な土地に、また何百メートルかの山上に、中世の古城跡が残されている。中世という時代は、武士が政権を握り活躍していた時代である。その武士が拠り所としたのが「城」であった。

城といえば、一般的には、見上げる天守、きらびやかな建造物、立派な石垣、満々と水をたたえた濠などを持つ、姫路城や名古屋城などの大城郭を考えがちである。しかし、これは近世の城であって、城のすべてではない。中世の城は「要害」であって、土地がけわしく、守るのによい場所、すなわち山岳丘陵等の起伏が激しい天険の山頂や山腹を利用して、大々的に空堀や土塁、削平地などの土木工事で要害をつくり、山麓に居館を置くのが一般的で「山城」と呼ばれている。

城の語源が「土をもって成る」とか「土を盛る」という意味からきているように、堀は土を掘り、塁はその土をかき上げてつくられるもので、堀と塁とは、山城を構成する最も基本的な防衛施設である。

武家文化における城郭の意義は、社会生活の平和と安全を保つための設備である。風雲急を告げる乱世になればなるほど、城そのものに期待する度合いは大きくなり、まして、我が国の歴史上にあらわれる弱肉強食の戦国争乱期ともなれば、城そのものは抵抗力の増加に期待をかける築城でなければならなかった。築城によって突撃には威力の前には、敵が簡単に近寄れず、その間に援軍の着到、あるいは敵方に不利な変化を生ずることも考えられ、運の開く場合の少なくないことは、歴史を通じて先輩諸氏の説かれているところである。

また、城郭調査にあたっては、周辺地の城や環境を無視して、ただ一ヵ所の城砦だけを究明し論ずることはできない。交通路や経済面、さらに本城と支城との関係なども明らかにし、放射線状にのびる広汎な地域を対象としての調査が必要となる。

新潟県内には、中世の城や館の跡が非常に多く、現在、その遺構が確認されている数は一〇〇ヵ所以上にのぼる。その内、上越地方には約一六〇城館が存在する。今後の調査で、見張り場や番所、のろし場などを含めれば、その数はさらに多くなると思われる。

山城としては、春日山城が代表的であるが、上越地方には、鮫ヶ尾城、鳥坂城（新井市）、箕冠城（板倉町）、直峰城（安塚町）、顕法寺城（吉川町）、猿毛城（柿崎町）、徳合城（能生町）、不動山城、根知城（糸魚川市）、勝山城（青海町）をはじめ、立派な中世の山城跡が多い。

かつて武士たちの居館や戦時の要害として活躍した場所も、時代が流れるに従い、知らぬ間に人々の心の中から消え去ってしまった。しかし、当時の面影は城腰（柿崎町）や要害（糸魚川市）などの集落名として残り、また、城に利用された山の頂上や中腹には、今その遺構を留めている。

城館と関係あった地には、小字名や通称名、俗称名として今に引き継がれている所も多い。城、城ヶ峰・城平・城ノ内、城ノ外・城ノ腰・高城・城ノ下・古城・大峰・御館・館ノ腰・館の内・尾立・馬場・狼煙場・物見場など数え上げれば際限がない。

春日山城と周辺砦群の配置

春日山城の城域を、さらに取り巻く周辺城砦群の存在がある。

現在、周辺には、一〇数ヵ砦が確認されている。これらの砦が、春日山城にいかなる作用をもたらしたかを考えてみたい。

【放射状に広がる砦群】

春日山を取り巻く周辺の山並み（半径四キロメートル前後）に点在する砦として、春日山城から二キロメートル周辺内に、番屋口・番屋・長沢・長池山、東城の五砦と権現堂、二キロメートル周辺内に、沖見・長浜・トヤ峰の三砦、四キロメートル周辺内に城ヶ峰・宇津尾・滝寺の三砦、御館、および毘沙門堂・陣取場、さらに五キロメートルに中ノ俣砦がある。

各砦を地形図上に置いてみると、春日山城を起点とする放射線上の要地に配置されていることがわかる。

これら一〇ヵ所の砦は、いずれも春日山城周辺の尾根要地や中継連絡を必要とする所に配置されており、砦分布区は、春日山城の身近な食料・薪炭供給地として、必要不可欠な城付きの地区であった。もし、春日山城が攻撃され、最悪の〝竜城〟になった場合には、食料・薪炭源などを守るため、春日山城としては絶対に離すことのできない、運命を共にする砦群だったのである。なぜなら、これらの砦は、その距離や普請、配置などに一城独特の構えは無く中心城（春日山城）に付属することで存在が認められ、かつ各砦間の相互関係を充分計算に入れた普請になっている。これは、一砦としての構えは弱くても、それが集団になってお互いに作用し合うとき、強力な備えになることを教えている。

春日山城を守った頸城の支城群

春日山城を取り巻く四～五キロメートル周辺内の、山並みに存在する多くの砦群と、春日山城との関連については、すでに述べてきた通りである。

ここでは、さらに輪を広げて、春日山城を守った頸城の支城群の配置について説明をしよう。

【高田平野を取り巻く支城群】

春日山を基点に、半径十五キロメートルの円を地図上に引くと、そのラインは高田平野を狭んで、南葉山系から関田山脈や東頸城丘陵の末端にほぼ一致する。今の行政区分に合わせると、上越市を中心に名立町・新井市・板倉町・清里村・牧村・三和村・浦川原村・頸城村・大潟町などにその範囲が及ぶことになる。

この十五キロメートルラインの山裾から丘陵にかけて、一〇〇ヵ所を超える城砦が、春日山城を要にして輪を描くようの点々と存在する。いわゆる高田平野を取り巻く支城砦群であるが、この地内は、戦国時代に春日山城の食料や薪炭などの物資供給源として、敵の侵入を絶対に許すことのできない必要不可欠な要地であった。

春日山城から十五キロメートル前後のライン、すなわち丘陵山裾を中心に、城砦が点々として輪をえがくように配置されている。これらの城砦は、それぞれに深い歴史を秘めていると思われるが、上杉謙信時代に合わせて考えれば、春日山城の死活を左右する大切な生命線だったのである。前述の春日山城を取り巻く砦群の存在が、春日山城を防備する第一次防衛線とすれば、この頸城の支城砦群は、第二次防衛線になる。

また、これらの城砦は無造作に配置されているのではなく、複雑な山並みを開析する多くの谷あいや川、道路を計算に入れた築城だった。さらに重要な地区には拠点城を置き、その周辺に衛星砦を設けて、一つのまとまったサークルを形成させる所もあった。黒田城・鉢ヶ尾城・鳥坂城・箕冠城・京ヶ岳城・池舟城・大間城などは、高田平野を取り巻く支城群の中でも、その規模や周辺の砦群、立地条件などから、拠点城だった可能性が高い。春日山城の支城であるが、またその周辺グループ砦の基点城となり、「伝えの城」として本城と支城との連絡城であった。

直江兼続公の足跡

幼少にして上杉謙信の薫陶に触れ、謙信没後は、上杉氏を相続した謙信の養子

春日山城と周辺の砦群（調査　植木　宏）

景勝に重用され、家老として内政・外交両面で活躍した。

時あたかも、時代が中世から近世的社会へと変わっていく動乱のなかで、主君景勝は豊臣秀吉の命で越後春日山城（新潟県上越市）から会津（福島県）一二〇万石に移され、その後、天下分け目の関ヶ原の戦いにおける戦後処分で、徳川家康によって米沢（山形県）三十万石に封ぜられた。この大変革に直面しながらも、兼続は上杉氏の家宰的地位にあって、時の情勢判断や政治の駆け引きに見事な手腕を発揮し、上杉家の存続に功をなした。兼続の各分野での立ち回りは、まさに、「景勝政権は兼続なくして存在せず」の感がある。

かつて豊臣秀吉に「天下の政治を安心して預けられるのは直江兼続など数人」といわしめ、徳川家康とも理（物事の筋道）をもって堂々と渡り合ったといわれる「直江状」など、将軍家康すら恐れた名将だった。きびしい武士の世界を生き抜いた直江兼続の人間像とその足跡の一端を追ってみたい。

生いたちから景勝の側近・執政へ

兼続は、永禄三年（一五六〇）樋口惣右衛門兼豊の長男として、越後国魚沼郡上田庄坂戸城下（新潟県南魚沼市）で戦国乱世の末期に生を受けた。母は信濃国（長野県）の武将泉弥七朗重蔵の娘といわれる。幼名を与六といい、元服して兼続、のち重光といった。弟二人、妹三人いた。

樋口氏は、家系図（「原姓樋口家系図」）によると、木曽義仲に仕えた四天王の一人、樋口次郎兼光の子孫で、兼光の弟の今井四郎兼平、また巴御前がいる。兼続の曽祖父兼定のとき、越後に来て上田長尾氏（坂戸城主）の家臣になったと伝える。

兼続の父兼豊は、坂戸城の台所で薪炭用人を務めていた。幼い兼続（十歳前後か）は父に連れられて、よくお城に出入りした。はきはきして行儀も良く、利発な行動をする子供だったので、城主長尾政景の奥方仙桃院（謙信の姉・景勝の母）の目に留まった。その才能を見込んで喜平治（景勝）の近習として立派な付き人になれると判断した。幸いに先祖は木曽義仲の四天王の一人だったこともあり、仙桃院の計らいで五歳年上の景勝と出合うことになった。

この二人の少年、長尾喜平治（景勝）と樋口与六（兼続）は君臣の関係ではあったが、ぴったりと呼吸の合った交わりで、共に謙信の人間性に触れながら成長した。そして謙信没後は、上杉家の歴史に大きくかかわる上杉景勝とその側近直江兼続になる。もし、仙桃院にその才能を見い出されなかったら、後世に伝えられる偉大な直江山城守兼続という人物は存在しなかったかも知れない。

兼続　直江家を相続

兼続が直江家を継ぐきっかけになったのは、天正九年（一五八一）九月春日山城中で、直江信綱が殺害された事件だった。それは、毛利秀広が御館の乱の戦いで戦功があったのに恩賞がなかったのは、景勝の重臣で儒者の山崎秀仙のせいだと恨み惨殺した。これをみて、側にいた直江信綱は秀広に斬りかかったが逆に殺害されてしまった。信綱にとっては恨まれてもいないのに、とんだ災難になった。

直江氏の出自は、遠く大化改心の功臣として知られる藤原鎌足の末流といわれ、須坂都直江庄を賜わってこれを姓としたと伝える。

直江信綱の養父、実綱（のち景綱）は、長尾為景、晴景・上杉謙信の三代に仕え、特に謙信の重臣として政治・外交などに活躍した（与坂城主）。景綱に嫡男がなかったので、上野国（群馬県）から長尾景貞の子信綱を養子とし、景綱の娘お船を妻にした。

信綱には子供がいなかったので、景勝は名家の跡の絶えるの惜しみ、樋口兼豊の長男与六兼続に命じて、信綱の未亡人お船の婿とし、直江家の跡を継がせたのである。と同時に、有能ながらも門閥を有さない兼続の取り立てでもあったのであろう。

時に兼続二十二歳、お船二十五歳であった。天正九年十月頃、兼続は直江家の居城である与坂城（三島郡）に城主として入った。山城守を称し、戦国大名上杉氏の家宰として、検地物奉行、蔵入地奉行など強力な権限を与えられ、徐々に上杉氏の直面する重要案件に関わっていくことになる。

〈兼続の賢夫人・お船の方〉

兼続の奥方、お船の方は兼続より三歳年上で一度夫に入となった人であるが、兼続は彼女を非常に愛し、仲睦まじい夫婦だった。お船の方はなかなかの賢夫人で、鎌倉時代に尼将軍といわれた、北条政子に似ているといわれた人である。景勝の嗣子定勝は生後間もなく母が死去したため、直江夫人が養育に当たり、春日局張りに奥向きの采配も任されていた。

兼続の死後は、扶助料三千石という未亡人としては稀な高禄を賜わり、武装した手明組四十人も従属されたという。藩主からも「山城守相果て侯とも大小の事とも後室（お船の方）へ相計られ侯よし」といわれ、米沢藩政にも参与した優れた夫人だった。

〈上杉景勝について〉

ここで兼続の主君になる景勝について少し述べておきたい。

上杉景勝（一五五五～一六二三）安土桃山・江戸時代前期の大名。越後春日山城主、会津若松城主、出羽国米沢藩主。弘治元年（一五五五）に生まれる。卯年だったので幼名を卯松と称した。父は坂戸城主長尾政景、母は越後守護代春日山城主長尾為景の娘（謙信の姉）である。坂戸城内で政景の次男として誕生。

永禄七年（一五六四）十歳のとき、政景は野尻池（湯沢町）で琵琶島城（柏崎市）主宇佐美定満と舟遊中に溺死（野尻池の変）した。父の死後は、叔父謙信の庇護を受け、養子となり喜平次顕景と名のった。謙信は顕景を非常にかわいがり、養父子の間は、尊敬と愛情の温かい絆で結ばれていたようである。

元亀二年（一五七一）～三年頃、春日山城に移ったという（国史大辞典）。十七～八歳の頃である。

兼続もこの頃春日山城下に入ったのではないかと推測される。ただ、残念ではあるが、謙信時代、また謙信死後の「御館の乱」（謙信死後の景勝・景虎の相続争い）中における兼続の行動を史料から明らかにすることは、現状では難しい。

天正三年（一五七五）一月、二十一歳のとき、上杉の名字、景勝の名前、弾正少弼の官途を与えられる。そして、「上杉家軍役帳」では筆頭の地位を占めた。

天正六年（一五七八）、謙信死後の「御館の乱」で反抗する勢力を撃破し、天正八年八月争乱を収め、兼続を執政として専政支配の基盤を確立した。

兼続の活躍（主なもの）

■御館の乱・天正六年（一五七八）、謙信死去後、養子の景勝と景虎の家督相続争い。兼続は景勝の近習として勝利に活躍。天正八年「兼続」署名初見。

■新発田城攻略・天正十五年（一五八七）、新発田重家は御館の乱の恩賞不満で景勝に背き、信長に通ず。

■佐渡の本間一統を征服・天正十七年（一五八九）、佐渡は本間一族が割拠し抗争が続いていたが、景勝の領国となった。兼続を中心とした上杉氏の支配。

■朝鮮出兵・文禄一年（一五九二）、兵五千人で肥前名護屋城（佐賀県唐津市）へ。兼続の陣屋は景勝とは別に与えられ同規模。朝鮮滞在一年三ヶ月。

■検地・文禄四年、慶長二年（一五九五、一五九七）、越後国内の検地で兼続中心になり実施。

■会津転封・慶長三年（一五九八）一月、景勝は秀吉より会津一二〇万石に移封を命じられる。兼続は米沢城三十万石を領す。同五年二月頃より景勝、神指原に新城建設始める。家康、景勝の上洛を強要、兼続、直江状を以って家康の要求を拒否。同年九月関ヶ原戦で東軍大勝。景勝敗者となる。

■米沢転封・慶長六年（一六〇一）、景勝三十万石に減封されて米沢城へ移される。移封後の課題は城下町の建設だった。兼続が総監として総指揮をとる。最上川に直江石堤、鉄砲の導入、青苧の奨励など。

■文人兼続・好学の武将として知られる。中国の史書や古典、五山文学、連句会、直江版文選など。

■「愛」の前立て・愛民の精神か、信仰か。

元和五年（一六一九）十二月十九日、江戸で没、六十歳。林泉寺（米沢市）に眠る。高野山清浄心院に分骨。

直江兼続（米沢市上杉博物館蔵）